

草庵仏教

第223号
(発行日)

2009年1月1日

発行所：真宗大谷派念佛寺

〒6638113 西宮市

甲子園口2丁目7-20

電話・FAX (0798)

63-4488

(発行人) 土井紀明

mail:bachkantata2mubansou@zeus.eonet.ne.jp

http://www.eonet.ne.jp/~souan

《 開法会ご案内 》

○ 〈同朋の会〉

毎月22日午後2時

○ 〈念仏座談会〉

毎月2日および12日
午後3時より。

○ 真宗共学会 --- 毎月2日と
12日。午後7時より。

* 8月22日同朋の会および8
月12日念仏座談会は休みます

宗教の「利益」

宗祖親鸞聖人が私たちに仰せ下さった大事な教えの中の一つに、**帰命尽十方無碍光如来**(阿弥陀仏)のお働きについてのお言葉があります。この中で、「尽十方」ということについて宗祖は「尽十方というは、尽はつくすという、ことごとくという。十方世界をつくして、ことごとくみちたまえるなり」と仰せられています。

阿弥陀仏は十方世界をつくしてことごとくみちておられる、と仰せになっています。あらゆる世界に生きるもの皆のところ、阿弥陀仏はまします。阿弥陀仏のはたらいていないところはなく、しかも阿弥陀仏は無量寿ですから、いつでもどんな時代でも、阿弥陀仏のましまさぬ時はないとのこと。

一番身近に言えば、だれでも、この私がいるところに阿弥陀仏はましますということ。しかも阿弥陀仏は、無碍光如来ですから、私がどれほ

ど煩惱が盛んで悪業の重き者であつても、私の煩惱や罪のいかにかわりなく、さわりなく、私を受けとり、浄土へと導き、浄土へ生まれさせてくださる大悲の仏様がましますということ。これこそ誰もしるべき恵みであり変わらぬ真実でありましょう。

阿弥陀仏を離れている私はなく、私から離れている阿弥陀仏はまします。だからといって、私が阿弥陀仏だといふのはありません。

私は煩惱具足の凡夫であり、逆に阿弥陀仏はこの上なく清浄真実の仏様です。すなわち阿弥陀仏と私は不可分(分かっべからず)・不可同(同ずべからず)の関係にあります。

この真実は宗教・宗派を超えている真実で、阿弥陀仏を神様といつてもよいのでしよう。この阿弥陀仏(神)にであうことが宗教の救いであり利益でありましょう。

宗教は何を人に与えるので

ありましょうか。それは阿弥陀仏が私と共にあって私を摂取してくださること、その摂取の利益こそが〈宗教のご利益〉でありましょう。

宗教の利益を頂けば病気が治るとか商売がうまくいくとか人間関係がことに良くなるとかというのは、間接的な影響があるかも知れませんが、〈宗教の利益そのもの〉とはいえません。

なお、宗教の利益は、この社会の諸問題を積極的(に)に担う生き方や、社会奉仕に生きる生き方を必ず産み出すという見方があります。しかし、宗教の利益を頂いた人が皆そのような活動者となるかという点、そのように限定することはできません。そういう活動をする人もあれば、活動をしていない人、できない人もいます。

らです。

この「摂取不捨の利益」をいただいでどのような生活をするかは、その人その人の宿業因縁によってさまざまでありましょう。

中には、政治的に平和運動に取り組んで下さる方や、人権の問題に専門的に活動下さる方もあります。自分の職業以外にそういう社会的な活動が出来る因縁の恵まれた人もあります。

ただ宗教の利益は、基本的には、仏様のご恩を思い、悪をつつしみ善をなすことを願いつつ、自分に与えられた仕事、農業なら農業、商売なら商売、学校の先生なら先生としての仕事を果たしていく、いわばそれぞれの生活する現場で、己の与えられた分を尽くしていこうという生き方へと向かわしめられるのでありましょう。(了)

謹賀新年

真宗大谷派 念佛寺

(責役・総代)

土井紀明 土井眞由実

中村穂積 迫田忠夫

宮野勲 中川政二

平成二十一年元旦

正信偈に学ぶ問答

(十一)

重誓名 声聞十方

(書き下し)

重ねて誓うらくは、名^{みょう}声^{しょう}十方に聞こえんと。
(現代語訳)

名号をすべての世界に聞こえさせようと重ねて誓われたのである。

*

G 「先月号で、阿弥陀仏は名聲(名号)となつて私たちに働きかけてくださるとのことでした。なぜ南無阿弥陀仏という言葉になつて私たちに喚びかけてくださるのかをもう少しお話してください」

D 「阿弥陀仏は智慧と慈悲といのちの量りなきはたらきです。それを知らせてくださるのが積尊です。積尊は阿弥陀仏の不可思議なお働きを感得されて、それを説いてくださったのです。それが浄土の経典です」

G 「阿弥陀仏は感得されて知られるものなのですね」

D 「そうなんです。感得されはじめて阿弥陀仏の働きを知るのであつて、感得されなければ阿弥陀仏の働きを知ることが出来ないのです」

G 「感知するというのは、体験する、経験する、覚るということで、内的に経験されることなのですね」

D 「ええそうなんです。仏様(阿弥陀仏など)とか神様あるいは浄土といわれるものは、内的に経験されて知れるものであつて、外界に見たり触れたり、科学的に観察したり観測して知られるものではないですね。心に感じて知るものです」

G 「心に感得して知るものであれば、阿弥陀仏や浄土を客観的な存在として、知ろうとしてもそれはできないのですね」

D 「そうなんです。ですからよく(仏とか浄土なんかどこにあるのか、どこを見わたしてもないではないか)といつて仏も浄土も否定する人がよくいます。それは仏の存在や浄土を客観的な存在として、知ろうとしているため、それは知れるはずがないのです。(知る)方向が違ふのです。心で感知すべきものです。積尊は不可思議な働き(いのちと智慧と慈悲)を感得されて、それを(阿弥陀仏)と表現されたのです。そして阿弥陀仏の働きを知らない私たちに阿弥陀仏の働きを感得させるために、南無阿弥陀仏という阿弥陀仏の言葉(名号)を称えよ、聞けよと私たちに勧めくださるのであります」

*

G 「南無阿弥陀仏を称え、聞くところに阿弥陀仏の働きを感知することができるのですね」

D 「ええそうです。南無阿弥陀仏の言葉には、阿弥陀仏に目覚ましめる働きがあるからです」

G 「人に、仏の働きに気がつかしめる様な言葉があるのでですね」

D 「ええ、言葉には大きく分けて三種類の言葉があるといわれています。それは情報言語と表現言語と命令・要求言語といわれています。その中の表現言語としての仏の言葉には人に(気づき)を發起せしめる働きがあるのであります」

G 「では情報言語とは？」

D 「情報言語あるいは記述言語といわれるものは、たとえば、(JR大阪駅で会いましょう)という言葉は、人に情報を伝える言葉で、聞いた人はその言葉の情報に従つて大阪駅で人に会うことができます。(毎月第二月曜日は燃えないゴミを収集します)というような言葉も情報言語です。こういう言葉は人それぞれ心の感情とか感知とか感動とかを述べた言葉ではなくて、外の情報を他者に伝達する言葉です。この情報・記述言語が今日一般的で非常に多く使われますので、情報言語が今日の社会では主流になっています。そのため、私たちは經典の言葉すらも情報言語のように取り扱つてしまいかねないのであります」

G 「次ぎに表現言語とは？」

D 「これは心に感知したり、認識したり、感動したものを表現した言語です。詩歌や宗教の言葉などです。たとえばお経の言葉の本質はこの表現言語です。表現言語というの

平成21年度御年忌年回表

13711	周忌	平成20年	亡
13712	3回忌	平成19年	亡
13713	7回忌	平成15年	亡
13714	13回忌	平成9年	亡
13715	17回忌	平成5年	亡
13716	23回忌	昭和62年	亡
13717	27回忌	昭和58年	亡
13718	33回忌	昭和55年	亡
13719	37回忌	昭和51年	亡
13720	43回忌	昭和45年	亡

(23回忌と27回忌をせずに25回忌にする数え方もあります。また50回忌以後は50年ごとになります)

は、たとえばバッハのバイオリン曲(シヤコンヌ)を聴いた人が(ああ深遠な美しさだ)と言う。こういう言葉は、心で感じたものを表現した表現言語です。こうした表現言語を聞いた人は相手と同じように心に経験して初めて相手の言葉の内容を理解することができるのであつて、(ああ本当に美しい)と自分も感じなければ、相手の言っている内容は分からないのです。積尊が(阿弥陀仏は光はかりなく、いのちはかりなし)と表現されたのは、積尊が感知し内的に経験されたものを表現した言葉であつて、同じように感じなければ積尊が何を云おうとされているのか分

雑記帳

からないのです。真宗の信心とはそういう釈尊の経験された内容に部分的であつても同様に感知したことだといえましょう」

G 「要求・命令言語とは？」

D 「これは他者に（勉強しなさい）（右向け右）というような命令するときや要求する場合の言語ですね」

*

G 「今、南無阿弥陀仏は表現言語であつて、南無阿弥陀仏を聴くことによつて阿弥陀仏の働きに私たちが気がつくことが出来るのですね」

D 「ええそうですね。しかも南無阿弥陀仏は釈尊の説かれた表現言語でありながら、阿弥陀仏ご自身が私たちにその働きを直接に告げ知らせる言葉だといわれています。南無阿弥陀仏を聞いて、（ああ、阿弥陀様が私たちとともにまします。阿弥陀様は私を離れず、私を大悲してくださっている）と感知されると、南無阿弥陀仏は阿弥陀様ご自身の自己表現のお言葉と知られてくるのです。そういう意味で仏の名号のような表現言語は人に仏へのめざめをよび起こす自覚喚起機能をもった言語であるといえましょう」

G 「南無阿弥陀仏は、人に仏の大悲への目覚めを喚起する機能をもった言葉なのでですね」

D 「ええそういう自覚が実際にその人の上に起こつてきます。それがいつ起こるかという時の違いはありますが。南無阿弥陀仏は阿弥陀様が（ここにいますよ、助けるぞ）とお知らせくださる言葉です。ですから阿弥陀仏は南無阿弥陀仏の名号となつて衆生に聴かせてくださり、（助ける、助ける）の仰せとなつて、ご自身の救いを知らせてくださるのです。阿弥陀仏は、喚びかけ続ければいつかは必ず衆生は気がついてくれると信じ切つて私どもに南無阿弥陀仏と喚び続けてくださっているのでありましょう。こうした苦勞があつて私たちは阿弥陀仏にであうことが出来るのでしよう。それゆえ阿弥陀仏は名声となつて衆生に聞かしまいたいと重ねて誓われたのでしよう」

G 「南無阿弥陀仏の名声になつて私たちに聞かせてくださるのには深いわけがあるのでですね」

D 「ええそうですね」

（了）

仏法を聞くということは自己保

身の心の様を知らされていくことでもある。自己の内心には、自分の利益を守り、自分の地位を守り、自分の名誉を守り、自分の評価を下げないようにし、自分の安全を守ろうという心が根付いている。

この自己保身の心を知らされ、自己保身の固まりである我が心にもとづいて生活を送っていることははずべきことである。そして、自己保身ということを広げれば家族の生活の安定確保でもある。これは身体をもつて生きているものにはやむをえないことであるが、しかし、そこに人間存在の浅ましさを感ざるをえない。

自己保身はさらに、自分たちの会社や共同体（教団など）の利益を計り安泰を守ろうとするのであり、更には国家の利益を守ろうとすることにもなつてくる。

なかでも怖いのは、自己保身の為に知らず知らず自分の立場や行いを正当化することである。自分の生き方をとかく肯定したいという自我の欲求が執拗に起こつてくるのである。

そのためにはどういう理屈でも理論でももつてくるのである。い

わゆる大義名分である。それによつて自分の立場を正当化するのである。大義名分の底にあるのはしばしば国家エゴイズムであり、共同体エゴイズムであり、マイファミリーエゴイズムであり、一身のエゴイズムである。

日本の多くの政治家が、国際関係のなかで日本がどう行動するかからさまに発言しているがそこにも怖さを感じる。戦前、日本がアジアに侵略していった時の大義名分は「大東亜共栄圏」で、アジアに於ける西欧列国の侵略と戦い、アジア諸国がともに平和と繁栄を実現するためという大義名分を掲げた。しかしその実、日本の国益の為にしか動いていなかったことは歴史の検証によつて明らかである。

今日のイラクやアフガニスタンでのアメリカ中心の戦闘の理由は「世界的テロとの戦い」という大義名分であり、そのためにアメリカの軍事行動を後方で支援してきたのが日本の現状である。それはアメリカの行動に抵抗するよりも、協力していく方が「日本の国益」になるからであるというのが日本政府のみにみえの論理である。国連の活動に協力をするよりもアメリカについていく方が国益になるという、国益主義。これは戦前の

戦争遂行の論理と内容的に同じであるといつていい。

そしてそれに賛同している経済界があり、企業集団がある。いわゆる共同体エゴイズムがある。

こうした国家エゴイズム、共同体エゴイズムを支えているのが、自分と自分の家族の安全と十分な生計の確保を求め、自分たちの保身を第一とする自己保身のエゴイズムからではなからうか。

自己一身のエゴイズムを凝視し、同時にエゴイズムの社会的結果としての国益主義の中にある国家エゴイズムからの国の行動にも批判抵抗することが大事であると思うのだが。こう聞かされていながら、自分もこうした社会の流れの中におり、よろよろしながら日々を送っている始末である。

しかしながら、自分と自分の家族の安楽や安定に傾いてしまふことに罪をやはり感じる。直接的には、それはこの身をもっているからであろう。罪業深重の身をもっているからであろう。仏が「すずめて浄土に帰せしめ」たもうのは、罪の身に働きたもう浄土の功德にどこまでも帰せよとの仰せであろう。自らの自己満足的な正義感ではどうにもならない。如来の働きをこの身にいただいていく外にはエゴイズムが浄化されていく可能性はないのではなからうか。（了）

信心夜話

《松並五郎念仏語録に聞く》十一

太字は松並さんの言葉。

*

○蟻は真直に歩いていてる様でも、障害物に当たれば方向を変え、亦方向を変えてぐるぐる廻っている。世間の法義者も、自分は真直に歩いていてると思いつながら、実は、こちらの布教師に会ってまわり、亦あちらの布教師にまわり、当りずめで、同じ道をまわりずめです。

(はじめはいろんな先生のお話を聞いて廻るのもよいが、やがて本願念仏そのものに直接し直参しなければならぬ。お念仏に直接せずに、説教を聞いて廻るだけでは、外周をぐるぐる回るだけに終わってしまいかねない)

○或るお方が「お寺さんは、『御文章』に〈寝てもさめても命のあらんかぎりは念仏申すべきものなり〉と書いてある。それを読んでいながら、念仏申さないが不思議や」と。

「そんな事不思議やない。それよりも、私や、貴方の口からお念仏が出て下される。それが不思議やがな」

南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏

(一声一声が如来様のお出まし。こんな有難い不思議なことはないのに、そ

れに驚きもせず、ご恩も思わぬ)

○「やせ蛙 負けるな一茶 これにあり」と。

一茶の句を拝見して

「やせ蛙 負けても一茶 これにあり」と。

私は、何事にも失敗しずめ負けずめ、でもゆるして下さる、ゆるされる、泣いて下さる、知って居て下さる、だいて下さる、だかれて居る、あたたかい御手がある、この声があります。

(「負けるな」を「負けても」と二字変えるだけで、仏の大悲心を表される松並さんの信眼には驚かされる)

○人々はまいらせて頂きます、やって頂きますと言いなさる。成程それに違いないが、自分の思いは何にもならぬ。「まいらす」との仏の仰せ、その呼び声が口に出る、聞える南無阿弥陀仏なれば、口にする必要はいらぬ。

(「助けてくださる」とか、〈浄土に生まれさせてくださる〉というのが、単なる自分の思い、ないしは思い込みでは何にもならぬ。阿弥陀仏の〈助ける〉の仰せを聞いてそれを、自分の心に念を押したりあるいは思い返したりする必要はない。そんな自分の思いで助かるのではない。〈助ける〉と仰せ下さる願力を聞くばかり)

○信心とは南無阿弥陀仏の親心を聞くだけ。

(南無阿弥陀仏を聞くとは仰せを聞く。仰せを聞くとは親心を聞く。聞くままと信心という)

○お盆が済んで、すぐお正月に晴着を着せたいとて、子供は頼みもせんに「親の業」で夜業までして働く。その時の苦勞は親は苦しみにならぬ。苦勞と思わぬ。正月の晴着が、お陰で楽しみの因となり、喜びの元となって、夜業にはげむ。念願とどいて、出来上がった晴着を着せようとした時、子供が「いやー」と言えば、親が楽しんで造った晴着が、かえって苦しみの根となる。晴着を持って行く場所がない。

それに、子供は「うん」と喜ぶ。出来上がった晴着を親はうれしげに子供に着せる。子供は両手を左右にのばせて、つつ立っているだけで、親は着物を着せ、帯を結び足袋ゾリーを履かせば、子供は隣りのおばさんに見せる。その姿を親が見て、子供が喜ぶ喜びよ、着てくれた、よく着てくれたと親が喜ぶ、喜びが大きい。着てもらっただけで親は満足する。

阿弥陀様も「お前は悪道から来て鼻歌歌って、また元の悪巢へ帰る」その姿をみそなわして「お前に頼まれもせんに勝手にお前の助かる南無阿弥陀仏に成ったぞや。いやでもあろうがこの度手柄をたてさせてくれよ」と、両

手仕えて頭を下げたでござる御姿お声が、今現にこの口から聞こえてくださる南無阿弥陀仏であります。そのままが御礼報謝にそなわる、うけとつてくださるとは、語る言葉もくち果てて南無阿弥陀仏。

称え聞くままた他に流れ出る。さすれば阿弥陀仏が十方衆生を救うと仰せられる御手伝いをしたことになる。いやいやの称名が御礼にそなわるとは。

合掌

(五劫永劫のご苦勞によって仕上げてできあがった南無阿弥陀仏。それを私たちが受け取ると、一番喜ばれるのが阿弥陀様でございますか。その上、称えているままた報恩行となり、衆生救済の仏のお仕事に加わっていることにして下さるとは)

○「念仏せよ 助ける」でない「助けるで念仏せよ」

(念仏はお助けの条件ではない。お助けに条件を付けないいわれがお念仏のいわれ。〈タスケルで念仏せよ〉はお聞かせぎりであって、聞いてから〈それじゃあ念仏して助けてもらいましょう〉ではない。多くは念仏をつかんで、〈我が名を称えるばかりで〉とまで仰せ下さる無碍広大な摂取の大悲を聞かない)

(了)